様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 22 年　5 月 13 日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2007～2009
課題番号：19520368
研究課題名（和文）ドイツ宗教改革期論争書の語用論的研究

研究課題名（英文）Research on the german polemical documents in the age of Reformation from the viewpoint of linguistic pragmatics.

研究代表者
新田　春夫（NITTA HARUO）
武蔵大学・人文学部・教授
研究者番号：00012443

研究成果の概要（和文）：

エックなどのカトリック神学者とルターなどのプロテスタント神学者は共に多彩な修辞的技巧を駆使して効果的な文書の作成に努めた。ただ、カトリック派が社会的に優越した立場から皮肉などを交えた間接的な表現を用いたのに対し，プロテスタント派は体制打破を目標とするところから，しばしば粗暴で直接的な表現によって相手を攻撃した。また、庶民の啓蒙と扇動を重視するプロテスタント派が平易な文章を書いたのに対し、神学的問題に世俗の庶民を関わらせてはならないという考えのカトリック派にはそのような視点が欠けていた。

研究成果の概要（英文）：

Both Catholic theologians such as Johann Eck and Protestant theologians such as Martin Luther tried to write impressive and effective polemical documents by using various means of rhetorics. However, Catholics usually made use of indirect expressions with irony because of their superior social position, whereas Protestants attacked often their opponents with rough and direct expressions in order to defeat the Establishment. Furthermore, while Protestants regarded it as important, to enlighten and agitate common people, they wrote documents, which were easy to understand for lay people, but Catholics lacked such idea and they thought, that common lay people should not be introduced to theological discussion.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	1,800,000	540,000	2,340,000
2008 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総　計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：独語学
科研費の分科・細目：言語学
キーワード：言語学、独語、社会語用論、論争、修辞的手段、ドイツ近世、宗教改革運動

１．研究開始当初の背景

（１）近世のドイツ語は今日のドイツ共通語の基礎となったものであるが、この時期はまた宗教改革期であり、カトリック陣営の神学者とプロテスタント陣営の神学者との間には自らの生き残りをかけた熾烈な論争が交わされた。これは主として公開状の形をとった論争書によって行われた。

（２）これら公開の往復書簡の形で発表された論争書におけるドイツ語文章は相手を説得したり、論破しようとするところから、論理的に明晰で、表現力に富み、また、皮肉的であったり、脅迫的であるなど、修辞的手段が随所に用いられたものであった。

（３）以上のことから、宗教改革期の論争書はきわめて実際的、実用的な言語使用の性格が顕著に認められるものであったと言える。

（４）従って、近世ドイツの文書に於けるドイツ語は統語論、修辞学・文体論などの領域におけるさまざまな言語的特徴の記述に留まらず、更に論争という場における言語使用や読者、文字が読めないために朗読を聞いている会衆などのコンテクストや社会的状況との関連において考察することが求められる。

２．研究の目的

（１）筆者がこれまでの研究において明らかにしてきた近世ドイツ語の書き言葉的性格、定動詞の枠外配置、語順によるリズムの生成と情報の配置などの言語的特徴と、論争書に使われている比喩、婉曲的表現、皮肉などのさまざまな文彩、修辞的手段との関わりを論争というコンテクストにおいて語用論的視点から分析し、新たに体系的記述を行う。

（２）本研究は論争という場における具体的な言語使用を分析対象とし、それに総体的コンテクストとしての社会的状況を背景において考察するものであるから、いわば社会語用論というべきものである。これは語用論研究のまだ新しい分野であるので、その理論的、方法論的な枠組みを構築する。

（３）これまでの語用論的研究は会話など、現代語の口頭での発話の分析が普通である。しかし、本研究の対象は宗教改革期といった歴史的時点での論争であり、また、文書のドイツ語といった書き言葉の分析であるという点でこれまでの研究とは異なっている。これは歴史的語用論研究と呼ぶことができよう。確かに、現代語の分析とは異なり、歴史的時点における言語使用の実態の分析には多大の困難が伴う。しかし、文書は書かれた時点では論争者が自らの言語使用を熟考し、吟味したものであるから、口頭による会話よりもかえって、言語使用の手段的可能性がより明瞭に表れていると考えられる。このことから歴史的社会語用論とも言うべき新しい分野を開拓することを試みる。

３．研究の方法

（１）カトリック神学者、エック、エムザー、ムルナーとプロテスタント神学者ルター、ミュンツァー、ツヴィングリの論争書を分析対象とする。

（２）それらの論争書における語彙、統語、構文、および、トポス、比喩、婉曲的表現、皮肉などの修辞的手段、文彩がどのように論争の為のストラテジーとして使われているかを分析、記述する。

（３）論争の場における言語的ストラテジーを体系的に記述するには社会語用論の理論的枠組みを援用する。

４．研究成果

（１）近世にあっては社会の流動化、生活圏の拡大などに伴って、さまざまな知識、情報伝達は主として文書によることとなった結果、文書および書き言葉の社会的重要性が高まった。

（２）エック、エムザー、ムルナーなどのカトリック神学者とルター、ミュンツァー、ツヴィングリなどのプロテスタント神学者との間の文書による論争においては極めて多彩な修辞的手段が使用され、高度な思想的対決が行なわれた。

（３）論争書が公開されるものであり、庶民が読んだり、朗読によって耳から聞いたりすることもあるという事情を顧慮して、ラテン語によって書かれることは稀になり、主としてドイツ語が使われるようになった。

（４）カトリック派が社会的に優越した立場から皮肉などを交えた間接的な表現を用いたのに対し，プロテスタント派は体制打破を目標とするところから，しばしば粗暴で直接的な表現によって相手を攻撃した。

（５）庶民の啓蒙と扇動を重視するプロテスタント派の神学者が庶民にも理解できるような平易な言葉使いによって文章を書いたのに対し、カトリック派の神学者は神学的問題に世俗の庶民を関わらせてはならないとの考えから、庶民の啓蒙はむしろ避ける傾向にあった。

（６）ただ、カトリック神学者のムルナーは風刺劇『ルター派の大馬鹿者について』(1522)などの阿呆文学の著作によって庶民に向けてルター派の思想を批判した。

（７）文書と書き言葉の社会語用論的研究という点では論争書のみならず他の類型の文書も併せて考察する必要がある。

（８）文書にはほんらいの作成意図があり、それによって文書類型が区別されるが、言語使用は文書類型によって異なるから、文書の語用論的研究は文書類型と関連させて総体的に考察することが求められる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 6 件）

①Nitta Haruo、Schriften als Kampf-instrument „des gemeinen Mannes“ – Die deutsche Literatur des Reformationszeit-alters、武蔵大学人文学会雑誌、査読無、41、2009 、pp.39-68

②新田春夫、ドイツ宗教改革期における民衆教化文書、『ドイツ文学』、査読有、140、2009、pp. 76-91

③Nitta Haruo、Ungeduld gegen Heuche-lei – Soziale Stellung und Sprachstil in den Streitschriften zwischen Luther und Eck、Akten des XI. Internationalen Germanis-tenkongresses Paris 2005、査読有、4、2008、pp.139-142

④Nitta Haruo、Sinn und Form – Eine rhetorisch-stilistische Analyse von Christa Wolfs „Blickwechsel“、Energeia、査読有、33、2008、pp.27-43

⑤Nitta Haruo、Sprachliche Einstellung im soziokulturellen Kontext des Reforma-tionszeitalters – Luther und Murner、武蔵大学人文学会雑誌、査読無、40、2008、pp.29-59

⑥Nitta Haruo、Urbane Eleganz gegen sarkastischen Grobianismus – ironische Stilmittel in den Streitschriften zwischen Emser und Luther、Strukturen und Funktionen in Gegenwart und Geschichte、査読有、2007、pp. 555-569

６．研究組織

(1)研究代表者

新田　春夫　(NITTA HARUO)

武蔵大学・人文学部・教授

研究者番号：00012443

(2)研究分担者

(3)連携研究者